

キラリ 山形 元気な 会員企業



《有限会社井筒屋》 榎森正浩代表取締役 法衣・袈裟の製造販売を中心に寺院・法具、仏像などを扱う。本店は山形市本町2・4・10。☎023・622・4748。横浜市鶴見区の曹洞宗大本山総持寺門前に鶴見店

山形市内七日町の旧洋品店のビルに縫製工場がある。1階から3階まで縫い子さんたちが、丁寧な針仕事が続いている。街のど真ん中に工場があるのは最近では珍しい光景となった。そこで作り出される商品は僧侶が身にまとう法衣(ほうえ)。生地は独自に開発したオリジナル。しかも10人の営業マンが北海道から九州まで、全国の寺院を飛び回って営業活動を展開している。

「山形発の法衣」を製造販売している仏壇仏具の店を紹介する。

井筒屋の歴史は江戸時代後期に始まる。暖簾分けを受けた初代が漆塗りと漆器を扱った。戦後、現在の代表取締役榎森正浩氏の父浩一(ひろかず)の代に家具と仏壇を扱うようになり、主に寺院への仏具商いを始めた。正浩氏は8代目。大手証券会社に勤めたのち家業を継いだ。30年ほど前のことで、本町に仏壇仏具販

売の店を構えながら、証券会社時代に培った飛び込み営業の経験を生かし単身、県内はもとより北海道、東北一円の寺院を回って法衣の注文を取り歩いた。

ところが、扱う品物は京都で作られたもので、お盆の時期には生産が間に合わず。こちらの注文はどうしても後回しになってしまふ。無理に数量を確保しようとすれば、品質が劣る品物を回されてしまうという状況が続いた。これでは商いが成り立たないと思案していた折、タイの首都バンコクでの法衣展示会に参加した。そこで現地の方に、「この国で法衣を作ったらどうか」と勧められ、製造販売に取り組んだ。

黄金の三角地帯で生産開始

タイは「微笑(ほほえみ)」の国とも言われる。人口の96%が仏教徒、寺院数約3万、僧は30万人を超え、一時出家を加えれば男子100人に

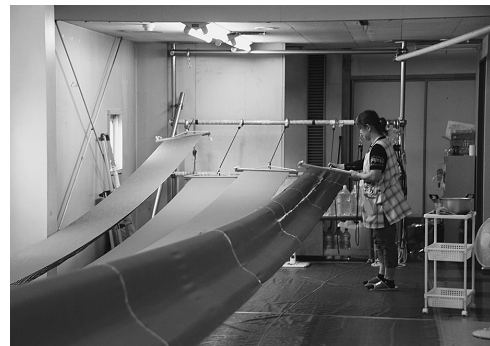
1人から2人が僧侶となる。紹介された地はインドシナ半島の奥深くタイ、ミャンマー、ラオス3か国の国境が集まる「ゴールデン・トライアングル」(黄金の三角地帯)の近くであった。

現地の女性たちの手の器用さは驚くばかりだった。数ミ単位で針を縫う。気の速くなるような仕事を黙々とこなす。加えて草木染の材料の宝庫。最尊最上の袈裟は糞掃衣(ふんぞうえ)と呼ばれる。出家僧侶は財産になるような私有物を持つことを禁じられており衣服も例外でなく、捨てられたぼろ布、汚物を拭(ぬぐ)うくらいしか用の無くなった布を拾い集め、縫い合わせた布を黄土色に染めたというのが、糞掃衣の名の由来。その染料となるパラミツ(波羅密、ジャックフルーツの木)が現地に林立していた。

こうしてタイの奥地で、日本では製造できない特殊な手仕事で仕立て



山形のまちのど真ん中の工場、山形女性の手で、独自の素材を使ったオリジナルの法衣が作られていく。



山形女性の手仕事、全国へ

ジナルの生地の開発に取り組んだ。そのひとつが「スーパーバルク」。従来の化学繊維の法衣とは異なり、独自に考案した撚糸を使用し、しなやかさとシャリ感、洗濯しても簡単に着崩れしない。銀鼠、葡萄茶、利休茶、濃藍など全36色を用意した。また、「三菱レーヨン」と共同開発した「シルキーワン」は正絹に近い肌ざわりと高級感が特徴だ。

「日本の中に行くと分らないでしょうが、アジアは急速に経済が発展している。最初に彼(か)の地に足を踏み入れ、現地の人たちと知り合った時とのことを思うと感慨深いものがある。独立心も極めて旺盛だ」という。そう遠くない時期に店舗近くの商店街の真ん中に、新たな縫製工場を新築し生産拡大する。「山形の女性の仕事ぶりを見て、あらためて山形人の仕事に対する丁寧さと真摯な姿勢に感心する」。

その上で「法衣の本場は京都と一般に言われている。生産量からすればなるほどその通りだが、(私は)本場はお釈迦様が生まれたインドだと思っている。とすればインドの前には京都も山形も同じ。多くの山形の女性の手で、山形発の法衣をもっと全国に広めていきたい。まちの中に仕事場を作り若い人たちに魅力ある職場を提供したい」。目を輝かせ八面六臂(はちめんろっぴ)飛び回っている。